

プレスリリース

Press release 2007.3.16



PATTERN 小松イサム展

— 弘前地域技術研究所の仕事 —

漆作家、小松 勇（こまつ いさむ）は、青森県の弘前地域技術研究所の主任研究員として、津軽塗の技術・デザイン指導に奔走しています。近年は、津軽塗による大倉陶園やオーストリーのロブマイヤーとのコラボレーションなどを実現するなど、その卓越した技術により、津軽塗の魅力をより、国内外に広く発信して続けています。

この展覧会は、漆作家、小松 勇の初めての個展です。

小松 勇は、藝大時代から一貫した視点を持っています。作家を志すその初期からテキスタイルデザインに深い感心をよせていたといいます。それは最小限のデザインのユニットが組み合わされ、無限に展開していく文様…PATTERN への関心であるとともに、作家が創造の中心に据える「総・個・同・宙」というホロニクスの思想へと繋がっています。

塗り、そして研がれる。塗りと研ぎ、この手間の掛かる工程を繰り返すことで浮かび上がる、無限に広がる小松勇による津軽塗の世界の一端を、この展覧会でご覧いただければ幸いです。

- 展覧会名 PATTERN 小松イサム展 弘前地域技術研究所の仕事—
会 期 2007年3月23日（金）～25日（日）
午前10時から午後5時
場 所 西衡器製作所本社2F「ゼフィルス」青森市新町2-6-20
（青森駅から徒歩7分新町通沿い）
入 場 料 無料
主 催 （株）西衡器製作所
協 力 青森県 弘前地域技術研究所、NPOアートコアあおもり

展示内容

青森での冬季アジア大会における津軽塗を使った金銀銅メダルや、津軽塗によるテーブルウェアをセット再現展示します。

また、オーストリーのハプスブルグ家御用達として有名なロブマイヤーとのコラボレーションによる鏡、ブラケットなど、藝大時代の制作作品から小松イサムの最新作まで、約25点を展示します。

主な出品作品

アジア冬季競技大会「公式メダル」(2003年)

70×70×7

開催地の魅力あるメダルを制作するとともに、国際的に津軽塗の知名度を高めることを目指し制作されました。1997年より調査・サンプル制作を開始し、AWAGOC、造幣局、津軽塗業界、塗料メーカーなどと協力をして、多数の試作を経て6年の歳月を掛けて完成に至ったもの。



ミラー

775×591×30 ガラス、MDF、セン 2006年度作

ロブマイヤー（ウィーン）と津軽塗の4技法の1つである紋紗塗とを組み合わせた鏡である。スクリーンプロセスを用いた紋紗塗の模様は幾何学模様で表現し、四隅シャンデリアで使用されるクリスタルピースをはめ込んだ。

結果、紋紗塗特有の「趣のある」映り込みと、鏡の映り込み、そしてクリスタルの輝きが品格のある作風となった。



展示内容

ブラケット

550×120×200 ガラス、MDF 2006年度作

ロブマイヤー（ウィーン）のシャンデリアと津軽塗の4技法の1つである紋紗塗とを組み合わせたブラケットである。

スクリーンプロセスを用いた紋紗塗の模様は幾何学模様で表現し、ホテルザッハで使用されるブラケットと組み合わせた。

結果、シャンデリアの醸し出す輝きが、紋紗塗特有の微妙な映り込みとが美しく融合し、しっとりとした室内空間を演出できた。



縄文八角形重箱

168×168×125 皿部：155×155×10

HOYAクリスタル製ガラス箱、ヒバ、合板、漆 2001年度作

HOYAクリスタル製のガラス箱と組み合わせた重箱。紋紗塗の縄文風仕様にした。

箱と蓋の正面はスクリーンプロセスを用いた紋紗塗（蓋はななこ塗ベース）、四隅は卵殻を貼り研ぎだし、箱の上縁は螺鈿を施した。また、銘々皿の縁は黒上げの唐塗施し、内側と裏の面は黒漆の塗り立てで仕上げた（銘々皿付き八角形紋紗塗重箱の内側は弁柄漆による塗り立て）。結果「凜」とした作風に仕上がった。



小松 勇 について

小松 勇 (こまつ いさむ)

1967年東京生まれ。

1993年 3月 東京藝術大学 大学院美術研究科 漆芸専攻 修了

同 年 4月 青森県工業試験場に技師として採用、現在に至る

主に従事した研究実績・指導歴・活動歴

- 93年度 「縄文漆器の復元」(同県立郷土館の依頼による)
「津軽塗新商品開発のための試作研究」(現在も継続)
- 94年度 「津軽塗後継者育成事業」(乾漆講習会) 講師
- 95年度 「仕掛け漆の調整に関する研究」
- 96年度 「研ぎ出し変わり塗に使用される顔料の塗布試験研究」
「津軽塗後継者育成事業」(デッサン講習会) 講師
- 98年度 「中小企業技術指導員育成課程6ヶ月コース」へ
(株)GKプランニングアンドデザインにて) 研修
- 99年度 「縄文漆器の実用化研究」(~12年度)
「世界漆藝展」 走過七千年邁向新世紀 台湾台中市にて
- 00年度 「津軽塗ロイヤルコレクションシリーズ」指導・支援 (異業種メーカーとのコラボレーション開始、現在も継続)
- 01年度 「ななこ塗の模様表現に関する研究」(~14年度)
「青森県伝統的工芸品産業産地振興事業/意匠開発事業」指導・支援 (平成15年度まで、3カ年)
- 02年度 「冬季アジア大会公式メダル」企画・制作支援
- 03年度 「文様研究」(~16年度)
「津軽塗デジタルアーカイブ」制作支援
- 04年度 「津軽塗&大倉陶園展示会「食卓の彩宴」」企画・支援
- 05年度 「津軽塗躍進戦略『TUGARU JAPAN』事業(新商品開発推進事業)」(~18年度)
「JAPANブランド育成事」指導・支援(継続)
- 06年度 「世界自然遺産「白神山地」のめぐみ開発プロジェクト事業」支援



作家のこぼ

青森県に来て今年で早15年目になります。私はここで色々な方々に育てて頂きました。特に津軽塗の職人さんには家族ぐるみでお世話になりました。学校出たての頭でっかちな私に自分の技術の総てを惜しみなく教えて下さいました。もっとも、私はその総てを覚え切れていませんが。

今回の展示会では大学院修了時の作品と、93年就職時から現在に至る「研究所での成果」の一端を御覧頂きます。

自分で振り返っても結構作ったなと思います。作品を制作する時のイメージは常に「全体と部分の共生感（総・個・同・宙）」という考えなのですが、客観的にみると初期の作品は「どうにかしてその「意志」を表現してやろう」と躍起になっていた、「自我丸出し」の気恥ずかしい物でもあります。

この歳になって、色々な方と交わることにより少しずつ、考え方や作る物が変わってきました。採用時の上司が何度となく言っていた「私たちの仕事は『ものづくりをする人達の環境を作る』こと」という言葉が、やっと少し分かりかけ、実践出来つつあるような気がしました。

育てて下さったたくさんの皆さんにご恩返しが出来ればと思っています。

平成19年3月吉日

小松 イサム